

ニュータウンにおける人口高齢化の特性に関する基礎的考察

A Fundamental Study on the Characteristics of Increase of Aging Population in the New Towns.

市原 直樹** 昌子 住江*

by Naoki ICHIHARA, Sumie SHOJI

1. 研究の背景と目的

ニュータウンにおける人口の高齢化問題が指摘されて久しい。高齢者の増加は、既に日常生活での自家用車利用が増えたため、衰退著しい近隣センターの現状に生活不安が広がるなどの具体的な課題を提起している。

特定年齢層が大量に入居することに起因するニュータウンの高齢化は、全国規模で進行する一般的な高齢化とは異なる状況を示し、一定の計画理念に基づいて設計された地域社会に独自の検討課題を提起すると考えられるが、これらについての基礎的な調査は必ずしも十分とは言えない。

本研究では、特に全国で最初にニュータウンとして整備された千里ニュータウン（以下、千里NT）と、近年人口増加の著しい港北ニュータウン（以下、港北NT）との比較を中心に、高蔵寺ニュータウン（以下、高蔵寺NT）、多摩ニュータウン（以下、多摩NT）等との比較を交えながら、人口動態から見たニュータウンにおける高齢化の特徴を明らかにする。

2. 調査の方法

ニュータウンの人口動態とそれに起因する課題点を把握するために、入居時期が異なりニュータウンの規模としても比較的大きい千里NT、高蔵寺NT、多摩NT、港北NTの1970年から2000年までの国勢調査に基づく人口データを集計し、集計したデータから明らかになることを整理した。

今回、人口データの集計するにあたっては、国勢

調査の町丁目別人口データを積み上げて合計している。また、町界がニュータウン内外にわたってしまうと実際のデータとの開きが出てしまうので、ニュータウン区域の町丁目を選定する際に、一定の条件を設定した（多摩NTに関して、町田市域は実際の人口は0になっているので、ニュータウン区域から外した。また、港北NTは、街開きが行なわれていない地域に関しては、町丁目がニュータウン区域の内外にわたっている場合があるため、新規で町丁目を創設した地域を、ニュータウン区域として捉えている）。

3. ニュータウンごとの人口動態の比較

まず、4つのニュータウンの経年人口変化と入居後の経年ごとの人口を比較した。

(1) 計画人口との比較

各ニュータウンごとの計画人口と年度ごとの人口の比率を比較すると（図-1）、千里NTは昭和50年の80%をピークに（81.7%）その後は減少している。また高蔵寺NTは1985年に60%を超え（64.6%）、その後は60%台を維持しているが、徐々に減少している。多摩NTと港北NTは入居開始後、増加の傾向にある。ただし、多摩NTの対計画人口比は、1995年までは5年ごとに約10%ずつ増加しているが、

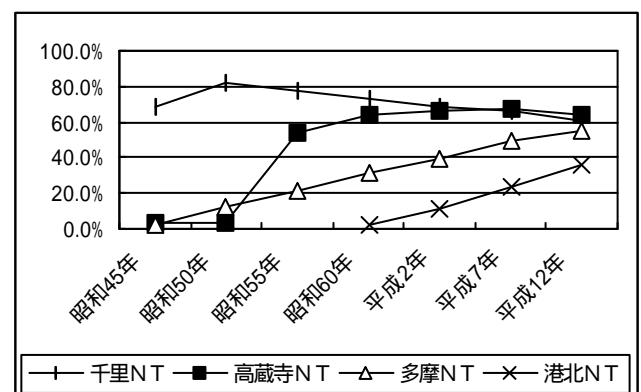


図-1. 各ニュータウンの対計画人口比

キーワード：人口分布、住宅立地、市街地整備

* 正会員 工博 関東学院大学工学部土木工学科

** 学生会員 関東学院大学大学院工学研究科

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1 工学本館328

TEL&FAX 045-786-7753

2000年までの5年間では5.9%と、増加が鈍りはじめている。港北NTを除く3つのニュータウンでは、計画人口に対する人口が60%前後に収束する傾向が見られる。

(2) 人口経年変化

1970年から2000年までの5年ごとのニュータウンの人口経年変化を見ると(図-2)、多摩NTと港北NTの人口は伸び続けている。港北NTに関しては、5年ごとに約3万人程度ずつ増えており、顕著な伸びを示している。高蔵寺NTでは1985年を境に微減の状態となっているが、全体としては安定した推移となっている。

しかし、千里NTは1975年をピークに人口が減少しており、現在も人口減少の状態が続いている。

また入居後人口経年変化に関しては(図-3)、それぞれのニュータウンの周辺状況のよって異なっており、現在でも人口が増加傾向にある首都圏近郊の多摩NTや港北NTでは、初期入居からある程度経ても、ニュータウン人口の増加は目立っている。

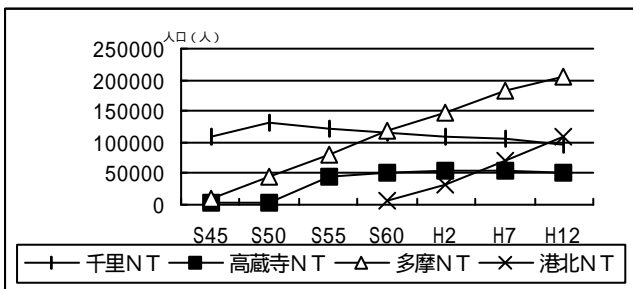


図-2. 人口経年変化

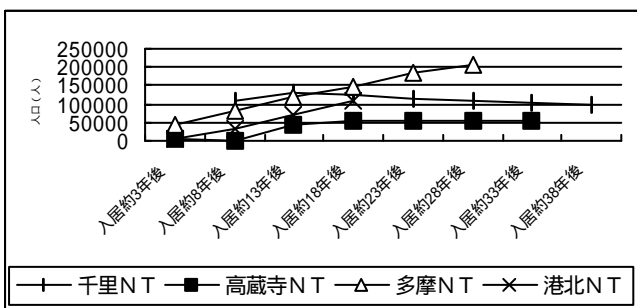


図-3. 入居後人口経年変化

(3) 世帯数の変化

平均世帯人員数(図-4)も全体的に減少傾向にある。多摩NTと高蔵寺NTでは、1970年には4.00

人を超えていたが、近年では2.59人(多摩NT)、2.69人(高蔵寺NT)と3.00人を下回っている。千里NTの平均世帯人員はもともと少なかったが、他のニュータウン同様減少しており、2000年には2.44人となっている。

港北NTに関しては、入居年次の段階で他のNTの平均世帯人員とほぼ変わらず、2000年には3.00人を下回っている。

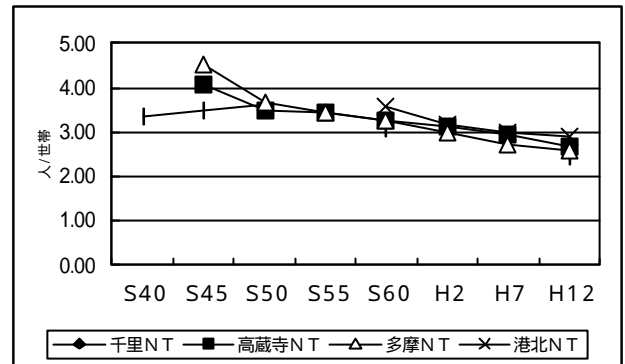


図-4. 経年平均世帯人員数変化

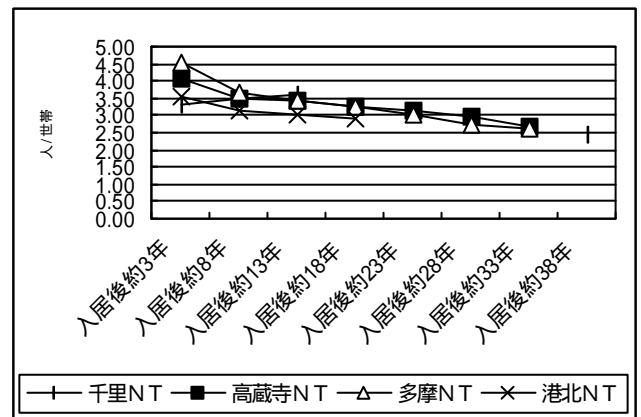


図-5. 入居後平均世帯人員数変化

また、入居後経年変化を見ると(図-5)、入居後3年ではそれぞれのニュータウンによって異なるが、入居後13年以降は千里、高蔵寺、多摩NTでは、同じような経過をたどっている。

(4) 高齢化率

全国、既成市街地と各ニュータウンの高齢化率を比較すると、全国的にも高齢化率の比率は上がっているが、ニュータウンの特徴としては、初期入居から数年の間は5.0%下回っている。千里NTを除いて、全国や既成市街地の高齢化率よりも下回っている。港北NTに関しては、入居を開始してから20年が経過しており、10.0%を下回っているが徐々に

増加しており、1995年から2000年の5年間で1.0%増加している（1995：5.0% 2000：6.0%）（図-6）。

また、入居年次を重ねてみると（図-7）4つのニュータウンともほぼ同じ傾向で高齢化していくことがわかる。港北NTは入居後約3年では他のニュータウンより低いが、入居後約8年を過ぎると高齢化率が上回っていることがわかる。

さらに、もう一つの特徴としては入居後約33年を過ぎると急速に高齢化が進み、千里NTでは入居後約28年から約38年にかけての10年間で8.3%（平成2年）12.2%（平成7年）19.1%（平成12年）と、約11%も増加しており、特に入居後約33年から約38年は約7%と急激な増加となっている。これは、初期入居の段階で20～30代であった

続いている港北NTを取り上げ、初期入居エリアなどの人口変化について比較してみた。

（1）世代ごとの年齢構成

千里NT、港北NTのそれぞれの年齢構成変化を見ると、千里NT（図-8）では初期入居時のピークであった30～34歳が現在では60～64歳を迎えており、世代人口は減少しているもののニュータウン全体の人口のピークがスライドしていることがわかる。しかし、0～14歳人口は人口減少の傾向にあり、この世代が自立する世代になると大阪都心部などの中心地への移住が多くなると考えられる。

港北NTの現状（図-9）でも全体的に人口増加傾向にあるため、各年齢層での人口増加が見られる。特に30～34歳、35～39歳の子育て層の増加は著しく、1995年から2000年の5年間で、どちらの世代とも約12,000人の増加が見られた。

しかし、5～9歳、10歳～14歳が大きく増えていないので、夫婦2人世帯もしくは夫婦2人子ども

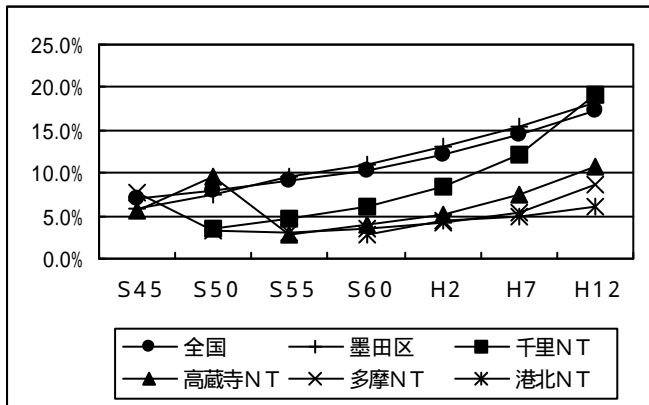


図-6．経年高齢化率変化

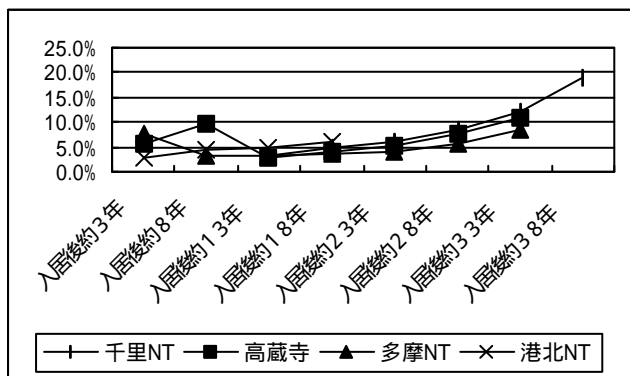


図-7．入居後経年高齢化率

世代がスライドして高齢化したものと考えられる。

4．千里NTと港北NTの比較検討

次に、入居から約40年経ち、高齢化が顕著に現れている千里NTと、初期入居から約20年が経っているが、現在でも開発途中であり、人口の増加が

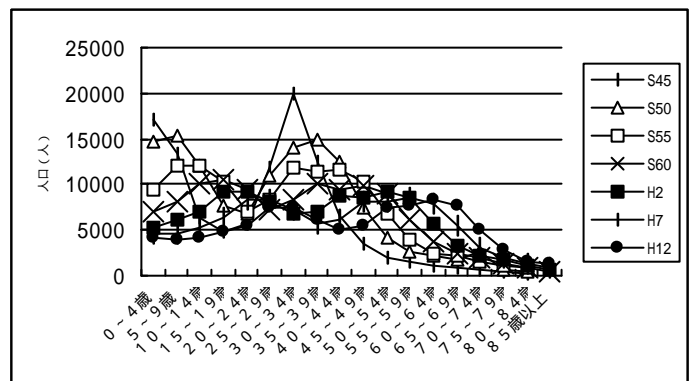


図-8．千里NT年齢構成変化

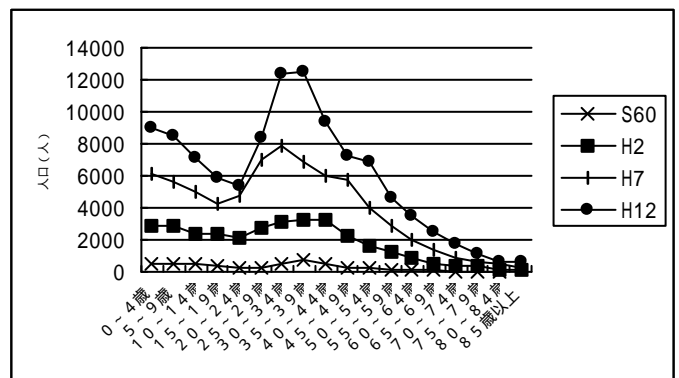


図-9．港北NT年齢構成変化

1人の3人世帯が増加しているものと考えられる。

（2）3世代経年人口変化

0～14歳、15歳～64歳、65歳以上の3世代で

の全体人口に対する割合は、千里NT（図 - 10）では、0～14歳の人口減少が著しく、1975年から2000年までの25年で約30,000人の減少となっており、ニュータウン全体の人口と14歳以下人口の減少により、相対的に高齢化率が上がってきている。また、港北NTでは（図 - 11）現在でも人口が増加傾向にあるため、顕著な高齢化は見られないが、徐々に増加傾向にある。

（3）初期入居エリアの高齢化率

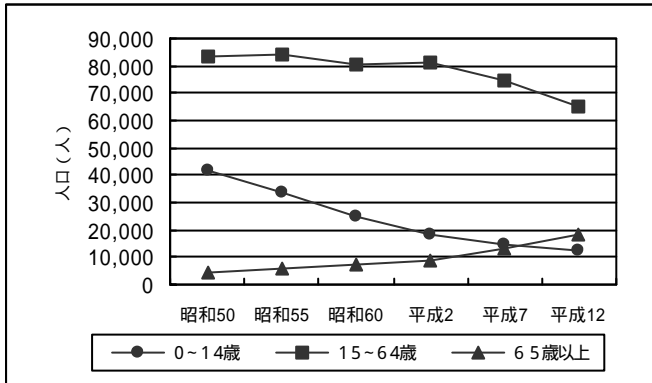


図 - 10 . 千里NTの3世代経年人口変化

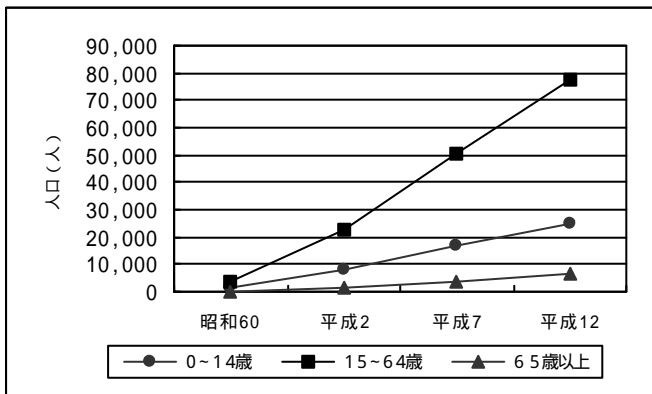


図 - 11 . 港北NTの3世代経年人口変化

次に、千里・港北のそれぞれニュータウンの初期入居エリアである、千里NTの佐竹台地区（吹田市域）、港北NTの荏田南地区の高齢化率を比較した。

千里NTの場合、入居開始直後から開発が急ピッチで行なわれ、それとともに人口の流入も急激に増えていった。そのため、入居7年目には対計画人口比率が70%台にまで膨れ上がった。初期入居エリアである佐竹台地区の高齢化率は、ほぼ千里NT全体の高齢化率と変わらない推移で高齢化が進んでいる。初期入居エリアにもかかわらず、高齢化率が20.0%を超えている他の吹田市域よりも低い値が出ているのは、建て替えが進んだり社宅などが分譲マンショ

ンへの転換していったことなどがあり、世代の入れ替えがあったと思われる。

一方、港北NTは入居開始から20年を経ているが、現在でも開発途中である。しかし荏田南地区などの初期入居エリアでは、徐々に高齢化が進行している。このエリアの特徴として、65歳以上の2人世帯が比較的多いこと、40代後半から50代前半の小中学生の子どもを抱える世代が多いことが挙げられる。うえ、人口の増加が収まったために、今後は典型的な高齢化が進行する可能性が高い地区と言える。

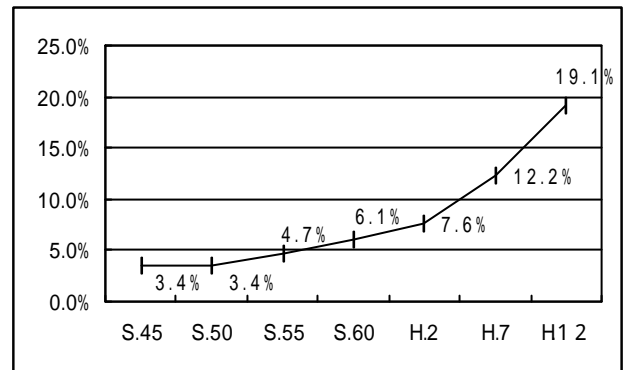


図 - 12 . 千里NT佐竹台地区高齢化率

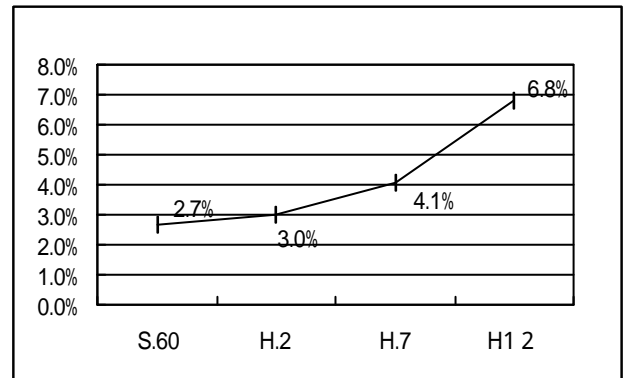


図 - 13 . 港北NT荏田南地区高齢化率

5. まとめ

今回の調査において、高齢化がどのニュータウンもほぼ同じような時期に進行する傾向がある、一時期に入居が始まったニュータウンの高齢化は急速に進行するが、入居時期にばらつきがある場合には部分的な高齢化が進み、全体としてはモザイク状の人口分布が起こる、などが挙げられる。今後は土地利用や居住条件などと比較しながら論じたい。